

ニッポン 海軍秘録

写真と文／平間洋一（元海將補）

“六本木刑務所”から最北の地へ

海上自衛隊の最新鋭艦「あまつかぜ」に乗れたと喜んでたのもつかの間、1年が過ぎた昭和46（1971）年12月、私は“六本木刑務所”と呼ばれていた海上幕僚監部調査部に転勤を命じられてしまった。

仕事が終わるのは早くて9時、予算要求の時期や年度末、事態発生時などは泊まり込みが普通。仕事を終え、防衛庁から六本木駅までの道はネオン輝く繁華街だ。成金男が派手な若い女を連れて歩いているのを見ると、俺たちはこんな連中を守るために働いているのかと、疲れた足がさらに重くなった。

1年半の“刑期”を終えた昭和48（1973）年7月22日、大湊所属の護衛艦「ちとせ」DE220艦長に任命された。ところが、東北は夏祭りの最中で、寝台券がどうしても入手できない。艦長交代の日時は決められており、八方手を尽くしたが買えないので、上野駅まで出かけて綿々と事情を説明してようやく手に入れることができた。

関東平野を過ぎ、福島を過ぎると町の灯火が極端に少なくなり、岩手県から青森県に入ると20分から30分くらい全く灯火が見えない暗黒の旅。夜が明け、野辺地で大湊線に乗り換えだが、乗客の会話はなにを言っているか分からず、延々と続く防雪林、時々壊れかけた家が見えては消える荒涼とした風景。えらいところに来たものだとショックを受けた。

大湊に赴任する者は、この風景に地の果てに来たのかと涙し、離れるときには純朴で暖かい



昭和49年度は対潜優秀艦に輝いた。全乗員で賞状を中心に記念写真。筆者は写真中央、賞状の隣り

下北の人々に別れる悲しさから泣き、海上自衛隊では大湊勤務者は2回泣くといわれている。

駅から自衛隊クラブに行き制服に着替え、艦長を迎えるサイドパイプの響きに緊張して艦長交代式に臨んだ。艦長訓示では指導方針（モットー）を述べるのが慣例であるが、旧海軍出身者の多くは「任務第一」とか、「精強団結」などの四文字熟語をモットーとし艦内に掲示していた。私は戦後派の艦長が着任したことを印象付けようと英語にした。

第一は第4次中東戦争でエジプト海軍に19対0で完勝したイスラエル海軍の「Follow Me（我に続け）」とし、第二はベトナム戦争で反戦運動に直面したアメリカ海軍が、艦長夫人を先頭に乗組員の留守家族の士気も高めようと使っていた「All One Family」を借用し、「Chitose is One Family」とした。

One Familyとは、家族的な暖かい思いやりだけでなく、家族の場合には事故を起こしても、能力が低くても見捨てることはできないだろう、乗員全員がみな家族だと考えてもらいたいという意味を込めた。最後に、船が壊れても金さえ出せば直るが、諸君が指一本失っても艦長として慚愧の念に堪えないので、「危なくなったら船を壊せ」「『ちとせ』にいたときが一番楽しかったといえる艦にしよう」と訓示を終えた。あまりにも短い着任訓示に乗員は驚いたようであった。

地元の誇りだった第31護衛隊

One Familyと公言した手前、いやがら家族を説得して連れて行ったが、1週間後にはすっかり慣れ、大湊弁を駆使して遊び回った。小平にいるときには日教組の先生に「警察官や消防士は市民に奉仕しているが、自衛隊は憲法に違反しアメリカ軍に奉仕している」と言われ、「お父さん、自衛隊を辞めて消防士になったら」と言っていた次男が、大湊では「お父さんは艦長でしょう。みんなの模範とならなければ」と諭され、父を尊敬するようになった。自衛官の息子という負い目を克服すること



「ちとせ」艦長時代の平間洋一。この頃の顔が一番引き締まっていたと思っているという

ができたのは、なによりの幸いであった。

また、現在では考えられないが、当時は家族の基地への出入りは自由で、大湊川官舎の子供たちは裏門から入り、正門を抜けて通学した。また護衛艦が係留されている棧橋はよく釣れるので、釣り竿を担ぎ、バケツを持って出かけていた。

当時は第31護衛隊が大湊在籍最大の護衛艦であった。滅多に母港に帰らないため、その出港は大きな行事であった。小学校では出港時に授業を中止し、手を振って見送り、各艦も応えて汽笛を鳴らす。家族も総出で高台から見送り、帰宅すると「なぜ、あそこで前進を掛けなかったのか」「右に舵をとればよかったのに」など指導が入るほど。また「『ちとせ』の汽笛が短かった。もっと長く鳴らせ」という注文もあった。

エリザベス女王が来日し、一番うれしかった思い出を聞かれ、マルタ基地で夫のエンジンバラ大佐が艦長をしていたときに、帰宅し家族と一緒に夕食を食べるときと言うのを聞いた家内が、「エリザベス女王様も私と同じことを考えておられるのね」と語り、私を支え続けてくれていたが、この原稿を書きつつあった夏の終わりに天国に旅立った。ありがとう（合掌）。

新米艦長の苦闘 「ちとせ」衝突事件

夏の日本海は平穏であり、個艦訓練や隊訓練では北海道巡航、体験航海など順調な滑り出しであった。しかし、10月からはじまった群や護衛艦隊の集合訓練では、群としては錬成訓練期だ

北の果て 大湊に新米艦長着任す 思い出の「ちとせ」艦長奮闘記

人もうらやむ最新鋭艦「あまつかぜ」勤務を終えた筆者は、
“六本木刑務所”などと言われていた海幕勤務を命じられる。
“刑期”を終えた後に待っていたのは、大湊の「ちとせ」艦長。
大湊勤務者は二度泣くというが、筆者もやがて……。



護衛艦隊サッカーで準優勝となった我が「ちとせ」のメンバー。小さな艦だったので予備も補欠もない。試合には強化訓練が必要だが、出した分隊は当直や勤務が増えるので2~3名しか出せなかった。怪我でもしたら欠員で戦うしかない

ったものの、艦長の私は着任から3ヶ月しか経っていない。夜間の対潜訓練やハイライン、洋上給油などが矢継ぎ早に行われヨタヨタこなしていたが、対空射撃訓練に出港した早朝、貨物船と接触事故を起こしてしまった。

悪天候から2回も対空射撃が中止され、早朝出港が続いたので、少しでも寝かせてやろうと総員起しを15分遅らせた親心が仇になってしまった。総員起しで顔を洗い、一応は配置に付いても、眼が暗さに順応するには時間がかかる。無灯火の貨物船の発見が遅れ、「面舵一杯、両舷停止、後進一杯、急げ！」を発したが間に合わず接触してしまった。相手は停泊中であり、責任はすべて「ちとせ」にある。賠償上問題はなかったが、問題は貨物船の描鎖に「ちとせ」のソナードームが触れてへこんでしまったことだ。ドックに入って基線修正を行わなければならない、金額的には大事故になってしまった。

一般に事故を起こした艦は士気が低下するものであるが、「ちとせ」乗員は一致団結し、年度最終の戦技に立ち向かった。結果、射撃は2位、対潜戦は5位、機関は3位、さらに護衛艦隊のサッカー競技では準優勝まで勝ち進んだ。

決勝の相手艦は「てるづき」で乗員は280名近い。一方「ちとせ」は80名。決勝戦ともなれば艦を揚げて旗や幟を振って応援するが、「ちとせ」の応援団は40名程度だった。まさか決勝戦にまで勝ち進むとは思わず、雲仙周遊観光バスを予約していたのである。観光を止め応援させるか、観光を強行するか——。乗員は行きたいだろうと考え、最小限の当直員を残して送り出し、残った乗員に応援させた。

多勢に無勢、「ちとせ」の応援団があまりにも少ないので、護衛艦隊司令官から、「艦長、どうしたのか」とご下問。「ハイ、ここまで勝ち進むとは思っていなかったの、半舷を観光旅行に出しました」と回答すると、「なに、平間……」とは言ったが、後の言葉はなかった。開いた口が塞がらないとは、このことであろうか。また、カーブ（評価）を下げてしまった。

最敬礼——「ちとせ」全乗員たちへ

第4護衛隊群の戦技やサッカー競技では好成績を揚げたが、戦技を終え函館で年次修理に入ると事故が多発した。11月11日には「酒に酔い運転、違反10回——逃げ回る暴走自衛官」とのタイ

トルで、函館で修理中の護衛艦「ちとせ」のA三曹が「酒酔い運転がばれるのを恐れて信号無視など10件を超える違反を重ね、パトカーから逃げ回った」と全国版で報道された。次いで3日後には「護衛艦ちとせ乗員S一士、函館市松風町の飲食店に忍び込みA子さん（64才）に乱暴。現場に官給品の靴下片方を残していたため、靴下を履いていないS一士を函館ドック前で逮捕した」と、これも全国版。「事故報告」や「事故防止対策」の提出で艦内はてんやわんやの状態となった。

上級司令部からは、大きく報道され自衛隊のイメージを損ねたので厳罰をと言われた。しかし、逃げ廻ったのは「ちとせ」の名誉を傷つける」と考えたからと聞き、上級司令部に反し罪一等を減じて軽処分にした。ところが、A三曹は3年後にまた飲酒運転をし、懲戒免職となったと聞いた。

一方、老母を暴行したS一士も家族の一員であると砲雷長などが雑誌や好物を差し入れし、釈放されると直ちに懲戒免職とはしたが、落ち込んでおり自殺でもしてはと、母を呼び寄せ、士官室で昼食を出して門出を見送った。

これに恩義を感じたのであろうか、免職後に故郷の気仙沼に帰り、マグロ漁船に乗って大西洋などに出かけては、毎年「謹賀新年 パルセロナにて」などと年賀電報や年賀状が届いていた。4年前の東日本大震災で被害を受けたのではと、かつての砲雷長が見舞いの手紙を出すと、1年半後の6月、家を流され昆布漁も打撃を受けたが、やっと立ち直りましたと昆布が送られてきたという。お裾分けを、と砲雷長から昆布が送られてきたときはうれしかった。

どこの基地でも「総員起し」の後は体操であるが、大湊では「総員起し」「雪かきはじめ」で夜が明け、「レーダー」を起動する。頭上に注意」の号令が掛けられる。レーダーから雪の塊が落ちてくるからである。



冬ともなれば上甲板は雪で覆われる。甲板を傷つけずに雪かきをするには、特殊用具（自家製）と技がいる

大湊の棧橋で「ちとせ」の前に立つ長男と次男。当時小学校6年生と4年生。奥には「きたかみ」DE213が見える

雪かきを終えて出港すれば、津軽海峡は低気圧の通路だ。石油ショックで物価が上昇し、「ちとせ」は新鋭艦でありながら予算不足からVDS（曳航ソナー）は後日装備、さらに艦尾を8mほど短縮したため、ウネリを受けると艦首から波をすくい、31番砲塔のレドームをへこます。救命筏が押し流され、ハンドレールやアンテナを曲げ、ご飯は炊けず乾パン食。しかも対空機銃は廃艦となった艦艇から撤去した年代物で、部品が摩耗し故障が多く、そのつど保管係留中の廃艦から部品を取り外して修理していた。一応、射撃員には「現有武器の全力発揮」などと檄は飛ばしたが、内心は命中弾を得るのではなく、故障することなく全弾が発射され、「対空射撃、終了、残弾なし」がなによりうれしかった。

雪深い大湊では普通の靴は履けない。乗員は滑り止め付きゴム長靴を履いて通勤していたため、横須賀などに入港し、雨が降ると上陸する乗員は長靴だ。さらに「ズコク整合を行う。ナナズ五分前」などと艦内外に大湊弁の号令が流れ、在泊艦艇の乗員には「下北の山猿が」などと揶揄されていた。

「ちとせ」は護衛艦隊の中で最も小さく、一番自然の厳しい大湊を定係港とし、訓練のたびに最も遠くから駆けつけていた。また錨地は先任順に決められ、護衛艦隊で最後任の私が艦長であったため、上陸する乗員は錨地から30分もかかるなど多大の迷惑を掛けた。

しかし、私には実直・誠実な部下に恵まれた「ちとせ」艦長が最高の配置であり、今も人生最大の誇りとしている。ここに「ちとせ」の全乗員に心からの謝意を表して結びの言葉としたい。

